

世阿弥自筆本(江口)の成立

—観阿弥作(江口遊女)・犬王作(竿ノ哥(室君))から—

田 口 和 夫

宝山寺藏世阿弥自筆本(江口)は、奥付の応永31年1424、既に成立していた曲に、古事談系の普賢遊女説話による訂正・切継ぎを加えて金春禅竹に相伝されたものである。その間の事情については、私論「世阿弥自筆能本(江口)から—『古事談』系説話との出会い—」(能楽タイムズ393号、昭59・12)において論じた。この二段階成立説には、落合博志氏「(江口)の構想と成立—形成の問題を中心に—」(能研究と評論15号、昭62・5)の批判があったが、この小論では、訂正・切継前の元の形(元)の成立について論じる。なお、落合論の中で、応永31年新作説以外の、「想像・臆説」として述べられた見解は今回の小論と重なる部分がある。また、本稿については西野春雄・八寫正治・味方健・竹本幹夫氏ほか多くの先行論があるが言及できず、骨格のみの提示となった。お詫びしたい。

五音上幽曲に「江口遊女 亡父曲 ソレ十二

因縁ノ」とある。先行説では、観阿弥作のこの曲舞を用いて、世阿弥が(江口)を作ったとされている。しかしこの曲舞の詞章の中には、遊女の想いはあっても「江口」を示唆する言葉が一切用いられていない。それなのに「江口」というのは何故か、観阿弥作の完曲(江口遊女)があったからと考える方が自然である。それが世阿弥作(江口)の中から析出できるのではないか。それが発見できれば、観阿弥作があった根拠となる。本稿の第一の論点である。

世阿弥作の能には統一イメージがある。自筆本(難波梅)を論じた時もその観点は有効だった。自筆本(江口)の(元)を分析してみよう。主イメージは「月」、副イメージは「舟」とみられる。小段を追ってまず「月」の有無を一覧する。「月有」1・6・7・9・12、「月無」2・3・4・5・8・10・11。この中で、小段8には「舟」があり、11は切継後の形で原型不明なので、

これらを外すと、「月・舟」の無い小段2・5がまとまっていることに気付く。2・4・アイの教え、ワキ僧と女が西行と江口の君が交わした歌について問答、5僧をやり込めた女が江口の君の幽霊だと明かす部分と、10曲舞である。それに12キリの「白妙の白雲にうちりて、西の空に行き」を加えたものが、もともと観阿弥作の能(江口遊女)として存在していた部分であったと考える。(10曲舞の中に「秋風蘿月」の語があるが、これは「翠帳紅閨」の対句として置かれたと見て、数えない)。さて、観阿弥作がこのような筋立てであったとすると、それは撰集抄巻九の八「江口遊女事」に基づいた構想(落合氏論)によって私論を訂正で、西行の代わりに僧が女にやりこめられ、女は遊女妙の幽霊として想いを語り(曲舞)、西方浄土へ行く、という曲になる。元からこの観阿弥作部分を引き算すると、世阿弥が加えた工夫が見えてくる。月のイメージで彩られた新しい内容は、おおむねアイ狂言の教えの中に指示されている。①江口の君は観音の化身である事、②昔の江口の長が川舟で遊び、後には歌舞の菩薩となって昇天する姿が月夜には見える事、の二点である。江口の長が観音の名を持つことは大江匡房の遊女記に見える周知のことだった。遊女「妙」の名を裏に隠して江口の長「観音」とし、それが「歌舞の菩薩」となる。世阿弥が新たに加えたも

のは、遊女たちが舟で登場し「棹の歌」を謡い、観音である江口の長が歌舞の菩薩として華やかな天女舞を披露することであった。こうまとめると、この部分が能(室君)の構成そのままであることに注目したい。

世阿弥自筆の(竿ノ哥ノ能)が存在していた。これが(室君)であったことは、ほぼ認められている。しかし、その成立については古作・世阿弥周辺作説があつて定まらない。古型である護法型のこの能をなせ世阿弥は書写したのか、私はこの能が犬王作の天女舞の能だったからだと考える。(室君)の遊女たちの「竿ノ哥」とシテの天女舞をセットとして、観阿弥の(江口遊女)とを取り合わせ、一曲を構成したのが世阿弥だった、本稿の結論である。以下、(室君)について考える。観阿弥没(至徳1年1386)後、將軍義満の御用役者として第一の地位にあつた犬王が天女舞を得意としており、その天女舞を「観阿弥の遺言」によって大和猿楽で「舞い初めた」のが世阿弥であつた。

落合博志氏「犬王の時代——鹿苑院西国下向記」の記事を紹介しつつ(能楽研究18号、平6・3)に、康応1年1391三月四日からの、將軍義満の西国下向に扈從した犬王たち猿楽役者三人の記事が見える。大船団の一行は嚴島参拜の後、九州へ行こうとして風雨に遮られ、引き返して三月二十五日に室の泊へ上陸する。祝宴があり、「犬王、室の御旅泊にて

哥仕りければ、山名播磨守よ所にて聞、感のあまりに犬王に白太刀、愛松に梅鮫太刀送り」とある。この二人が謡ったのが「竿ノ哥ノ能」の謡だったと考える(「竿ノ哥」部分だけの可能性もある)。同行していたもう一人の役者彦王は出演しなかったらしいから能ではなかったろう。詞章の作者は犬王ではなく、同行していた遁世者の「珠阿・楽阿・心阿」のうちの誰かと推測する。「春の夜の室の海、月の御舟に棹さした室君たちが、春の叙景の後、夏秋冬の豊年を祝う」という「竿ノ哥」は將軍一行の船旅が無事だったことと、今後の治世とを言祝ぐ謡として、これ以上ないものであつた。中に「近江の湖を二度も歌い込むのは近江猿楽の犬王のための「哥」だったからであろう。私は、帰京後(康応から隔たらない頃)に犬王がこれを能として演じ、それを観て、世阿弥が書き残したのが(竿ノ哥ノ能(室君))であつたと考える。室津の遊女については、玉林作の曲舞(西国下)にも「室の泊の苦屋形、影は隙漏る夕月夜、遊女のうたふ歌の声、憂き世を渡る一節も、まことにあはれなりけり」と描かれ、憂き世を渡るつらさを歌う事が典型的な把握になっているが、田中貴子氏の「作品研究「室君」」(観世、平4・3)は、仏教的な罪業感ではなく「室君は神事の華やかな点景」の役割でしかない、とされている。これは、前に云う祝言としての「竿ノ哥」という観

点と付合する。世阿弥の(江口)の「棹の歌」は、これを学びながら玉林と同様、遊女の想いもきちんと書き込んでいる。そして歌舞の菩薩の舞は犬王の天女舞のものであつた筈である。世阿弥の創作ではあつても、根幹は先行作を利用したものであつた。天女舞の導入に新作としては成功しても、それは犬王の真似に過ぎない。世阿弥が犬王の天女舞から脱皮して新しい菩薩舞を創出したのが改訂版(江口)だったと私は考えるのだが、それは別論による。

落合博志氏「所見曲に関するいくつかの問題」(能と狂言1、平14)に、応永三十四年演能番組に見える能(佐保山)が(室君)に先行するという説がある。根拠は「竿ノ哥」の「裁ち縫はぬ衣着し人もなきものをなに山姫の布晒すらん」(古今集)は、作者伊勢が龍門で詠んだもので、これを「佐保山」に繋げるのは、能(佐保山)を前提として可能というものである。しかし、原義を離れて、山姫が春の女神である佐保姫であると解すれば、「佐保姫の織り掛け晒す薄はたの霞たちきる春の野辺かな」(古今六帖五、袖中抄にも)、「春くれば麓も見えず佐保山に霞の衣たてぞ掛けける」(国基集)とあるような佐保山の景ととりなす事は容易である。(室君)から(佐保山)に影響したと考えれば落合氏の論拠はすべて使用可能なのである。(文教大学名誉教授)